実践研究
私の保育ノート

「遊べない三人組」～三歳の遊びのはじまり

鈴木裕美
（幼稚園教諭）

年少組（三歳児）の四月といったら、それはもう大騒ぎで、「ママがいいの～」「せんせい！　せんせい！」「エーン！」といろいろな声が響き、保育者も子どもたち一人ひとりが一日でも早く幼稚園で安心して過ごせるよう必死である。

そんなふうにドタバタした中、A子は、B子、C子といつも一緒にいるようになっていった。三人は登園すると、そろって園庭へ出かけ、タイヤブランコやジャングルジム、滑り台などの固定遊具で遊んだり、園庭を走ったりして一緒にいることを楽しんでいた。

A子は五月生まれで、小学生の姉、兄がおり、しっかりした印象の女児である。幼稚園に入園する前に保育園に通っていたこともあってか、身の回りのことはたいてい自分でできき、保育者を頼る機会が少なかった。

年少組の一学期は、友達とのかかわりよりも、保育者との信頼関係を築き、自分の好きな遊びやモノに出会うことを大切に考えているが、この三人に関しては、友達とかかわっ

鈴木裕美（すずき ひろみ）
学校法人駒場けやき学園駒場幼稚園教諭。

ていることが多く、好きな遊びやモノに出会うというところへのアプローチが難しかった。

B子、C子にとって、A子はお姉さんっぽい雰囲気で、一緒にいることがうれしい存在のようであったし、A子は、B子とC子が自分のそばにいてくれることで安心している様子であった。

三人の中でお姉さん的存在のA子は、保育者が、砂場で泥んこのお料理を作ったり、保育室でおままごとをしたり、いろいろな遊びに誘っても、「汚れるからいや～」「やらない」「もうおわりにする」と言ってなかなか楽しめずにいた。

B子、C子も、「わたしも！」とA子について行くことが多かった。

「遊べない三人組」というのが、五月、六月と保育者間でもよく話題に挙がっていた。

私は、入園して間もない今は遊べなくても当たり前、それぞれのありのままの姿を受けとめようと思う反面、このままではずっと遊べない三人組になってしまうかも、と少々焦りも感じていた。

担任としてどうやって一人ひとりと向きあっていくのか、『遊び』とは何か、三歳児にとっての遊びとは何か、三人にとっての遊びとは何か、いや一人ひとりにとっての『遊び』を考えなくてはいけないのではないか……悶々としていた。

一学期後半になっても、三人は相変わらず一緒にいて、それで安心していることが多かった。

しかしある日、A子よりも先に園庭に出て

いたB子とC子が、二人でバケツの中に土を入れて「ごちそう作ってるから食べに来てね」と楽しそうにしていた。保育者がごちそうを食べに行くと、それがうれしくて、繰り返し楽しむ姿があった。そこに後からやって来たA子が「わたしはやらない」とB子、C子に言った。しかし二人には届かず、一人になったA子は途端に不安そうになった。

三人で以前と変わらず一緒にいる日もあるが、B子、C子は、少しずつ幼稚園での遊びの楽しさに気づき始めている様子がうかがえた。

一方A子は、日に日につまらなそうな表情になっていった。

夏休みを挟んで二学期。

「〇〇のカードのゲームでね、いろんなかわいいお洋服とかの絵が描いてあるの」。小学生の姉と一緒にしたカードゲームの話を楽しそうにしてくれていたA子。

「面白そうね。それ、幼稚園でも作れるかな」と私が提案すると、A子は「えー、できるかなあ」とうれしそうな顔をした。

私は、A子の好きなことを探り、寄り添うことを大切にすることから始めていこうと思った。

遊びとして長続きはしなかったが、A子は次第に私を頼ってくれるようになり、甘える姿も見せられるようになっていった。そして、A子は、一学期ほどB子、C子に頼らなくなってきていた。

私は、あらためてクラスの一人ひとりとのつながり、関係を見直していくことにした。一学期にしっかりつながりができている子は安定してきているし、まだまだな子はどこか不安を残し、遊びに集中できていないように感じた。A子は当然ながら後者に当てはまった。

二学期半ば頃。

「病院ごっこがしたい！」という友達とA子は意気投合し、数名の友達と一緒に病院ごっこを始めた。「看護婦さんは白い服を着てて、帽子をかぶってるよ」「お薬を作ろう」「ベッドを作ろう」と、A子からもいろいろなイメージが出てきて、保育者の手を借りながらイメージを形にしていく過程や、友達とのやりとりを楽しむ姿が見られた。

やっと！　やっと！　A子が楽しそうに、生き生きとした表情を見せてくれた。この時の保育者たちのにんまり顔といったら！　待っていてよかった！　A子の変化をみんなで喜び、うれしく受けとめた。

A子やB子、C子の姿を通し、三歳の遊びのはじまりについてあらためて考える機会をもらった。保護者の中には「お友達と一緒なら安心」と考えている方も多く、その意識が子どもにも伝わり、友達に依存してしまう子も少なくないのではないだろうか。人(友達)と一緒にいることにこだわり、その存在に頼っているうちは、なかなか『本当の遊び』に出会えず、どこか不安感も抱えたままである。

遊びって？　自発的な遊びって？　なぜ『遊べない』と保育者は捉えるのだろう？

保育者として、いろいろなことに思いを巡らせ、悩みながら、自分に問いかけながら、子ども自身の育とうとする力を信じて待ち、支えていくことの大切さにあらためて気づかされたように思う。

A子はやっと遊びを通して自分自身を表現し始めたばかり。この先、遊びの中で自分と向きあい、他者とかかわり、どんなことを学んでいくのか……とても楽しみである。